

学んだ文法を使う活動実践 - ペアで映画を紹介する活動を通して -

A practical activity by applying acquired grammar
-Through pair activity that introduces movies-

藤田裕一郎

要旨

本稿では、授業で学んだ文型を生きた（意味がある）文脈で使う機会を与えるべく、ペアで好きな映画を紹介する活動を行った。その目的は、①文法の授業で学期中に学んだ文法項目を意味がある文脈で使う機会をつくること。②5分程度のまとまりのある内容が伝えられるようになること。③プレゼンテーションに慣れることの3点である。

発表後に、学習者、教師それぞれが振り返るとともに、学習者同士での相互評価も行った。その結果、目的の②③は概ね達成できたものの、①については、十分達成できたとは言えなかった。このことについて、学習者の注意が発表の内容などに強く向けられるため、言語形式に向けられる注意が減り、学んだばかりの言語形式よりも使い慣れた言語形式を使う可能性が考えられた。

また、原稿やスライドの作成に時間をかけすぎ、発表練習が十分できなかつたとの反省点から、活動全体における時間配分などが今後の課題とされた。

キーワード ペア活動 映画の宣伝 発表 Microsoft power point

1. はじめに

主教材を使う中級レベルの文法の授業を振り返ると、1) のように学習文型の前件や前部分を下線にしたり、または後件や後ろ部分を下線して、下線部を埋める練習をすることが多かった。

1) 地震によって、_____ **恐れがあるので**、注意してください。

(太字部分が学習文型)

しかし、このような短文の練習では、誰がどのような場面で誰に対して発した文なのか学習者がつかみにくいこと。一文のつじつまが合っていればよく、必ずしも意味が正確に分かっていなくても答えられる場合があること。実際の言語使用とは大きく異なることなどの問題点があるように思われる。したがって、このような練習を重ねるだけでは、学習文型が使えるようになるのに十分であるとは言えないかもしれない。そこで、授業で学んだ文型を生きた(意味がある)文脈で使う機会を与えるべく、ペアで好きな映画を紹介する活動を行い、後日その活動を振り返ることにした。

2. 活動内容とその目的

本活動の内容は、5分から10分程度でペアで Microsoft power point (以下、PPT) を使い、自分たちが好きな映画を宣伝するかたちで紹介発表することである。その目的は、①文法の授業で学期中に学んだ文法項目を意味がある文脈で使う機会をつくること。②5分程度のまとまりのある内容が伝えられるようになること。③プレゼンテーションに慣れることの3点である。

3. 活動について

3.1 クラス状況と学習者の背景

本活動を行ったクラスと学習者の背景をまとめたものが表1である。

表1 クラス状況と学習者の背景

学習者の人数と国籍	14名 (ベトナム人10名、中国人2名、ミャンマー人1名、マレーシア人1名)
学習者の日本語レベル	初中級 (自国で3ヶ月から半年程度学習した後、日本で半年から1年学習中)
授業科目	文型・文法 (週5回、各日1コマ90分)
授業の目標	自分の考えや意見を、状況に合わせて日本語能力試験のN3レベルの語彙・文型を選択し、自然な日本語で表現できること
使用教材	学ぼう! にほんご 初中級

学習者は14名でベトナム人を中心とする多国籍なクラスだった。学習者の日本語レベルはいわゆる初中級で、日本語学習歴は9か月から1年半程度(国で3ヶ月から半年程度学習した後、

日本で半年から1年学習中)だった。本活動を行った授業科目は文型・文法で、月曜日から金曜日までの各日に90分の授業があり、使用教材は『学ぼう！にほんご 初中級』だった。授業の目標は、自分の考えや意見を、状況に合わせて日本語能力試験のN3レベルの語彙・文型を選択し、自然な日本語で表現できることだった。授業内容は教科書に合わせ、文型の練習、本文読解、各課のテーマに合わせたミニ作文・聴解などだった。

3.2 活動の準備

発表までの準備として、①動機づけ、②イメージ作り、③発表のペア決め、④発表の準備を行った(表2)。

表2 発表の準備

活動の手順	内容	活動時間
①動機づけ	教師が自身の好きな映画をサンプルとして発表	15分
②イメージ作り	先学期の学習者が行った同内容の活動の映像を3つ視聴	20分
③発表のペア決め	くじによってペア決め	10分
④発表の準備	<ul style="list-style-type: none"> ・発表する映画の選択 ・発表のアウトライン作成 ・原稿の作成 ・PPT スライド作成 ・発表練習 	90分×2回、 自宅で準備

①動機づけは、教師が自身の好きな映画をサンプルとして紹介発表した。②イメージ作りは、先学期の学習者が行った同内容の活動の映像を3つ視聴した。③発表のペア決めは、くじによって行った。④発表の準備は、発表する映画の選択、発表のアウトライン作成、原稿の作成、PPT スライド作成、発表練習の順に行った。発表の準備には90分1コマの授業を2回分取り、ペアごとにそれぞれのペースで順次準備を進めるように指示した。この間教師は、学習者からの質問に答えて発表原稿のチェックをしたり、準備の進み具合を確認させたり、発表練習の聞き役になってアドバイスをしたりした。

PPTでのスライド作成について、PPTを使ったことがない学生が何名かいた。しかし、準備の段階でパソコンに詳しい学生が率先してスライド作成をしたり、できる学生ができない学生に教えるなどして、教師がPPTの使い方について指導することはなかった。ただ、できあがったスライドについて、字が小さいとか、図表を挿入したほうがいいなど、発表についてのアドバイスは行った。

4. 発表

発表順は当日にくじで決め、60インチのテレビ画面モニターにPPTを映し出し、各ペア5～10分程度で発表した。発表の際はできるだけ原稿を読まず、前を向いて発表するように伝えた(ただし、原稿を見ることは禁止しなかった)。発表者以外の聞き役の学習者は、発表者ペア

の発表の準備具合、発表内容、発表のし方をそれぞれ3点、3点、4点の計10満点で評価するとともに、発表を聞いた感想を書いてもらった。また発表後には5分程度内でコメントや質問を受け付ける時間を設けた。

発表した映画は「火垂るの墓」「風立ちぬ」「盲導犬クイール」「ミラクルワールドブッシュマン」「Heart is」「タイタニック」「cast away」だった。

また、別のクラスの学生約15名にも発表を見てもらい、どのペアの映画を見たいと思ったか、上位3番までを投票してもらった。別クラスの学生に発表を見てもらう目的は、ビブリオバトル^{注1)}の要素を取り入れることと聴講者の数を増やすことで発表者のやる気を喚起することだった。聴講した学生に対しては次回同じような機会があったときのためのイメージを作りと、他者の発表を見ることによって学習意欲を高めてもらうなどの狙いがあった。

なお、発表の様子はビデオカメラでデジタル録画し、発表後にUSBにデータをコピーして希望した発表者に渡した。

5. 評価と学習者の振り返り

発表の翌々日の文型・文法の授業の際に45分の時間を取り、録画した映像をモニターで視聴しながら記憶を呼び起こし、各自発表を振り返ってもらった。この際、相互評価の結果と感想を各ペアに渡すとともに、別クラスの視聴者による投票結果も公表した。

振り返りの中で出た意見には、緊張したが、おもしろかったという意見が多く、その他、緊張してうまく話せなかったという意見や、練習したとおりにできなかったが、発表する自信がついた。もっと発表練習をすれば良かったという意見などがあった。

点数による相互評価を行った結果は、準備具合が平均2.62点（3点中）、発表内容が平均2.40点（3点中）、発表のし方が平均3.00点（4点中）だった。

相互評価における感想では、次のようなコメントが見られた（表3）。

表3 相互評価における感想

- | |
|--|
| <p>a. ○○さんは、説明のし方、文法、話し方、どれも良かった。○○さんは、原稿を読んでいるだけだった。</p> <p>b. 字はちょっと小さいです。写真はたくさんあります。分かりやすいです。</p> <p>c. 「イメジ」じゃなくて、「イメージ」だと思います。</p> <p>d. 発表の内容は長いです。発表の時間は長いです。</p> <p>e. 字は小さくてたくさんあります。○○さんはたくさん話したが、○○さんは少ししか話ませんでした</p> <p>f. 分かりにくかったです。さらに、発表することがあまり良くなかったです。でも、映画は面白そうですから、家で見てみたいと思います。</p> <p>g. 字が少なくなる、いいことです。</p> |
|--|

注)「○○さん」の部分は個人名だったため、筆者が匿名になるようにした

コメントの内容は、発表の内容に関すること、発表のし方や発表スライドに関すること、日本語に関することなどに分けられた。全体的には、他者の発表を褒めるよりも、なんらかの指

摘をするコメントのほうがやや多いようだった。

6. 学習者が使用していた学習文型

発表の際、学習者が使用した学習文型を含む文が表4である。

表4 学習者が使用していた学習文型の使用例

- | |
|---|
| <p>a. 若者を中心に観客（数）が増えています。</p> <p>b. この（空き）缶は彼らの生活にとって、便利なものになりました。</p> <p>c. 災害の（災いが降りかかる）恐れがあるので、（空き）缶を捨てに行きました。</p> <p>d. 1945年の飢餓のせいで節子は亡くなりました。</p> <p>e. 両親にかわって清太が節子の世話をしなければなりませんでした。</p> <p>f. 戦争が長くなるにつれて、節子と清太の生活はだんだん大変になりました。</p> <p>g. 誕生日プレゼントとして、生まれたばかりの子犬を盗みました。</p> <p>h. 子犬が死んで以来、マウミはチャンニが嫌いになりました。</p> |
|---|

注) 太字は学習文型を表し、筆者によって付け足した部分に（ ）を付けた

すべての学習文型について正確に使用できていたわけではないが、概ね使用可能な状況で使用できているようである。「～にとって」などはいくつかのペアで複数回使用されており、使用しやすい文型と使用しにくいがあるようだった。全体としては、学習した文型項目が約90であったのに対し、使用できていた文型の数は10ほど（異なり数）だった。

なお、準備の段階で教師のほうからこの文型をここで使用しなさいというような文型使用に関する積極的な働きかけはしなかった。これは学習者の自主的な言語使用と内容を中心にした活動にしたいと考えていたためである。

7. 教師の振り返り

発表の準備、発表日、振り返りの授業を担当した教師（筆者）は、この発表活動について、次のように振り返った（表5）。

表5 教師の振り返り

- | |
|---|
| <p>a. どのペアもまとまりのある内容を発表でき、意図した内容が伝えられたことで自信がついたようだ。</p> <p>b. 学習した文法項目をうまく文脈に落とし込んで使えるペアと、伝える内容に意識が向きすぎるせいか、学習した文法項目をあまり使えていないペアがあった。</p> <p>c. 授業で学んだ文法項目以外にも、初級の文法項目、授業では扱わない語彙や接続詞などが使用されていた。</p> <p>d. 全体として、発表のスライドと原稿作りまでに時間がかかる傾向があり、発表練習により時間を割けるように準備の進め方を改善したいと感じた。</p> |
|---|

発表の内容に関しては、どのペアも準備した内容を PPT を使って最後まで発表できていたた

め、肯定的な振り返りをしている（表5a）。一方、日本語に関しては、ペアによって学習した文法項目の使用に差があったこと（表5b）。初級で学んだ文法項目や授業では扱わない語彙や接続詞などが使用されていたこと（表5c）から、否定的に感じられた面がある一方、新たな気づきも見られる。また、活動全体を通しては、原稿やスライドづくりに重きが置かれ、発表練習が不十分になってしまった（表5d）と振り返り、全体の時間配分が改善点だとしている。

8. 考察

本活動の目的は、①文法の授業で学期中に学んだ文法項目を意味がある文脈で使う機会をつくること。②5分程度のまとまりのある内容が伝えられるようになること。③プレゼンテーションに慣れることの3点であった。準備のでき具合にはペア間の差が見られたが、全ペアがPPTを使用して発表できたこと。相互評価における準備具合が平均2.62点（3点中）、発表内容が平均2.40点（3点中）、発表のし方が平均3.00点（4点中）と低くなかったこと。また相互評価におけるコメントにも「意味が分からなかった」等の内容はほぼなかったことから、②③については概ね達成できたのではないかと考えられる。ただ、①の学んだ文法項目を意味がある文脈で使う機会をつくれたかについては、学習した文型項目が約90であったのに対し、実際に使用されていた文型は10ほど（異なり数）だったことから、十分達成できたとは言えないかもしれない。このことについて考えてみると、学んだ文法項目を使う機会がなかった可能性と、学んだ文法項目を使う機会があったものの、使えなかった可能性が考えられる。前者の可能性については、発表時間が5分～10分あり、準備の段階で各ペアA4に4、5枚程度原稿を書いていたこと。活動内容が映画の宣伝発表で、学んだ文型の多くは「～といえば」「～に応じて」「一方だ」などの使用範囲が広い機能文型だったことから、発表時間による発話量の制約や、学習文法項目が使える文脈がなかったという可能性は低いと思われる。そのため、後者の学んだ文法項目が使えなかった可能性が高いのではないかと考えられる。発表に向けて原稿をつくる準備時間は十分あったため、発表内容の発話の言語形式にも注意を向けられる余裕はあったはずである。また教師も、できれば学んだ文型を使うようにと指示を出し、言語形式に注意を向けるように促していた。このことから、学んだ文法項目を使うように注意を向けられる状況にはあったものの、学習文型に注意が向けられなかったのではないだろうか。峰（2015）は、Levelt（1989）の発話モデル^{注2）}をもとに、言語処理と概念処理が発話時におけるワーキングメモリに占める割合が言語発達とともにどのように推移するか、図1のように示している。この図では言語能力が発達していない段階であればあるほど、言語処理に大きなメモリを使ってしまい、概念処理に使えるメモリが少なくなることを示している。だが、言語能力の発達とともに言語処理の自動化が進むと、言語処理に使うメモリは減り、その分概念処理にけるメモリが多くなるとされる。

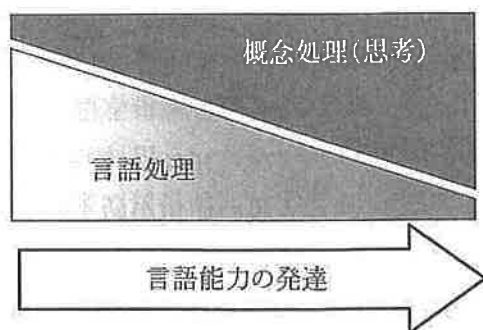


図1 言語処理の発達と概念処理の関係 (峰, 2015: 140)

本活動における学習者の発表はこの逆で、発表時において、内容（概念処理）や発表にかかわるさまざまなこと（スライドの操作や発表時の発音など。また過度の緊張も影響すると思われる）に多くの注意を向けなければならなかったため、言語形式に十分な注意を向ける余裕がなくなってしまい、自動化が進んだ、つまり使い慣れた文型や表現を使ったということは考えられるだろう。また、Levelt や峰の発話モデルは、発話時における言語と概念の処理について述べているものであるが、時間的余裕がある発表準備段階においても、原稿を書く作業に熱中するあまり、学んだばかりで定着しきっていない言語形式に意識が向けられず、使い慣れた文型や表現を優先的に使用してしまうということも考えられる。他方、教師の振り返りの中にも、授業で学んだ文法項目以外にも、初級の文法項目や授業では扱わない語彙や接続詞などが使用されていたとの言及があり（表5c）、この可能性に矛盾しない意見になっている。また、初級の文法項目や授業では扱わない語彙や接続詞については、受身の表現や「そして」「そのため」などの接続詞の使用が見られた。発表の中で映画の登場人物やあらすじを説明するといった状況におかれ、登場人物各々の視点から物事を表現する際に受身が必要になったり、出来事を次々に描写していく際に「そして」「そのため」などの接続詞が必要になったためだと考えられる。

9. まとめと今後の課題

本稿では、授業で学んだ文型を生きた（意味がある）文脈で使う機会を与えるべく、ペアで好きな映画を紹介する活動を行った。その結果、限られた時間の中で準備を行い、発表を通し、プレゼンテーションに慣れるとともに、まとまりのある内容を伝えることができた。一方で、学習した文型の使用率があまり高くなかったこと。準備に時間に時間がかかり、発表練習にそれほど時間が割けなかったことなどの反省点も見られた。今後、同様の活動をする際は、学習した文型をより積極的に使用してもらうよう促し方を工夫したり、発表練習の時間をしっかり確保するため、準備を段階的に区切るなどの改善が必要であると考えられる。また、このような活動の目的を、学期中に学んだ文型を使用することにするよりも、現在持っている知識を総動員して行う総合的な活動と位置付け、内容を中心にしながらも幅広い日本語の使用を期待する活動にするのもいいと思われる。

いずれにしても、本活動を通して得られた反省点を生かし、今後の活動の一助としたいと考える。

<注>

1. ビブリオバトルとは、発表参加者が読んで面白いと思った本を持って集まり、順番に一人5分間で本を紹介する。それぞれの発表の後に参加者全員でその発表に関するディスカッションを2～3分行い、全ての発表が終了した後に「どの本が一番読みたくなったか」を基準とした投票を参加者全員一票で行い、最多票を集めたものを『チャンプ本』とする活動のことである (<http://www.bibliobattle.jp/koushiki-ruru> 参照)。
2. 通常母語話者が発話する際、はじめに注意を向けるのは概念（発話内容）であり、その次の段階で概念をどのような言語形式で表現するか注意を向けるとする。また、母語話者の場合、通常言語処理はほぼ無意識でされるとする。

参考文献

- Levelt, W. J. W. (1989). *speaking: From intention to articulation*. Cambridge, MA: MIT Press.
- 峰布由紀. (2015). 『日本語教育学の新潮流 13 第二言語としての日本語の発達過程 言語の思考の Processability』ココ出版.

朝日大学留学生別科